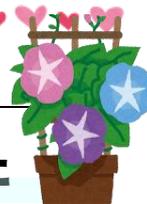


ボランティアだより

秋田県立視覚支援学校 秋田県立聴覚支援学校 秋田県立秋田きらり支援学校



「かがやきの丘 ボランティア講座」が開催されました

7月28日（月）・29日（火）の両日、かがやきの丘3校の主催により、視覚障害児（者）・聴覚障害児（者）・肢体不自由児（者）の支援に関するボランティア講座を開催しました。

毎年たくさんの方から申込みいただいているこの講座ですが、今年は高校生を中心に20名の皆様がかがやきの丘に足を運んでくださいました。今回の受講が、ボランティア活動や障害について関心をもっていただくきっかけになればと思います。



講演会「ボランティアの基礎基本」

秋田市社会福祉協議会の橋村翔太氏・堀田麻衣子氏を講師にお迎えし、ボランティア活動の基本的な心構えや県内の現状についてお話いただきました。

まず、活動を続けるためには「無理をせず、自分のペースで行うこと」が大切であるということ、また、依頼者やチームメンバーとの信頼関係を築くためには、気持ちのよい挨拶や丁寧な自己紹介が重要であると教えていただきました。

学生1万人を対象としたボランティアに関する意識調査では、約60%の人が「様々な人との交流により考えの幅が広がった」と感じていることが紹介され、ボランティア活動が人とのつながりを深め、視野を広げる機会になることが分かりました。

しかし、現在県内のボランティア活動は会員の高齢化や人口減少、新型コロナウイルスの影響などにより減少傾向にあるということです。次世代への継承に向け、新たな担い手の確保が重要な課題となっていることを知りました。

秋田市では平成29年の大雨災害をきっかけに災害ボランティアの周知が進み、一昨年の豪雨災害後に災害ボランティアセンターが開設されたことで、遠く九州からもボランティアの方が駆けつけてくれたとのこと。災害ボランティアの実例や準備についても具体的に説明していただきました。

また、時間が取れない人でもできる社会貢献活動として、物品寄付（フードドライブ）といった形での参加も紹介されました。「できることから始める」大切さを感じる講演でした。



展示コーナー

かがやきの丘3校で使用されている教材・教具や様々な書籍を、直接手に取っていただきながら、障害への理解を深めていただきました。



視覚支援学校



聴覚支援学校



秋田きらり支援学校

聴覚支援学校「聴覚障害児・者の理解とかかわり方」

音が聞こえる仕組みや、聞こえの程度が人によって様々であることを学んだ後、耳栓や音声を遮断するヘッドホンを使用して、聞こえにくい人の気持ちを理解する難聴擬似体験を行いました。体験後は「自分だけ会話について行けないと感じた」「周りは楽しそうだけれど、状況が分からなくて不安だった」という感想が聞かれました。

聞こえない、聞こえにくい状況下では、非常に不安な気持ちになり疎外感を感じることや、文字やジェスチャーで教えてもらおうと安心するということを実感していただけたようです。

手話研修では、学校生活でよく使用する言葉を手話で表現したり、挨拶の手話や自分の名前を指文字で表現して伝え合ったりしました。

今年度は東京デフリンピックが開催されます。ニュースで活躍するろう者・難聴者、デフアスリートを目にする機会も増えました。今回の講座が、手話への興味の高まりや障害のある方とのコミュニケーションに役立てたら嬉しく思います。



秋田きらり支援学校「肢体不自由児・者の理解とかかわり方」

今年度のボランティア講座は、車椅子や手の不自由さ、足の不自由さの体験をしました。

身体が不自由な方と関わる際の留意点については、「コミュニケーションを大切にすること」「どのような介助が必要で、どのように介助してほしいか」「安全に留意すること」を学びました。

車椅子体験では、車椅子に乗る方、介助者の両方を体験しました。車椅子に乗っている方の立場になり段差や狭い通路を体験したり、介助者になってどのように声を掛けたらよいか考えたりすることができました。お互いの立場になって考えることの大切さを学びました。



視覚支援学校「視覚障害児・者の理解とかかわり方」

「見えない」「見えにくい」とはどういう状態なのか、いろいろな見えにくさを体験し、適正な距離や見え方によって異なるサポートの方法について学びました。アイマスクをした状態で紙を折ると複数の折り方が見られたことから、視覚から情報を得にくい相手に対しては、より具体的な指示を伝える必要があることを実感しました。

また、アイマスクをした相手を誘導する「手引き」では、相手に必要な情報を伝えるとともに、安心して歩けるような言葉掛けを考えて支援する様子が見られました。

